

# 福澤諭吉 朝鮮近代化への夢と挫折

拓殖大学 学長  
渡辺 利夫

このところ福澤諭吉全集（慶應義塾編纂、岩波書店）所収の、福澤がみずから創刊した『時事新報』の社説を読み込むことを一つの仕事にしている。もとより執筆者は福澤である。開国・維新期の緊迫した内外情勢をこの不出生のジャーナリストがいかにか論じていたのか。これを改めて勉強してみたいというのが、この新聞に毎日のように目を通して理由である。

『時事新報』社説の白眉は朝鮮論にあらうと私には思われる。福澤は李朝末期、日清戦争にいたるまでの朝鮮をまことに厳しく論じた。ただ論じたばかりではない。現状を改革せねば朝鮮の将来はないと考える、「開化派」と称される一群の若手官僚を指導し、朝鮮留学生を慶應義塾に受け入れ、密かに武器弾薬を送って彼らに決起を促したのが福澤であった。ひとたび成功した開化派のクーデターが袁世凱率いる清軍によって潰れたとの報に接し、その深い絶望と憤怒を福澤はみずから発行する『時事新報』に寄せた。これが明治18年（1885）年3月16日付の「脱亜論」である。

福澤は朝鮮に「恋」をしていたという説があるほどである。なぜ福澤がそれほどまでに

朝鮮のことを深く思いつづけたのか。

福澤は明治14（1881）年に、2人の朝鮮留学生を初めて留学生として慶應義塾に受け入れた。彼らを受け入れることになった事情について語っている文書に、ロンドン留学中の門下生に宛てた書簡が存在する。そこにはこう認められている。

「本月初旬朝鮮人数名日本の事情視察の為渡来、其中壯年二名本塾へ入社いたし、二名共先づ拙宅にさし置<sup>おき</sup>、やさしく誘導し<sup>やりいそろう</sup>遣居候。誠に二十余年前の自分の事を思へば同情相憐れむの念なき<sup>えず</sup>を得、朝鮮人は外国留学の当初、本塾も亦外人<sup>また</sup>を入るゝの発端、実に奇遇<sup>もうすべく</sup>と可申、右を御縁として朝鮮人は貴賤となく毎度拙宅へ来訪、其の咄<sup>はなし</sup>を聞けば、他なし、三十年前の日本なり、何卒今後は良く付合開らせる様に致度事<sup>いたしたきこと</sup>に御坐候<sup>ござさうろう</sup>」

杵淵信雄『福澤諭吉と朝鮮』（彩流社）によれば、文中「二十余年前の自分の事」とは、兄の急死によって大阪の適塾で蘭学を学ぶことが不可能となって困惑する福澤に緒方洪庵が洋書翻訳の仕事を与え窮地を救ってくれたことを指し、「同情相憐れむ」はこの時の心情を思い起こして「拙宅にさし置、やさしく

誘導し遣居候」となったという。

2人の留学生を受け入れたことが機縁となってその後朝鮮人が福澤邸を訪れることが多くなるが、彼らから聞く朝鮮の現状は、門地門閥によって身分が固められ社会的上昇など思いも及ばなかった「三十年前の日本」である。家督を継いだ福澤が困窮に耐えられず家財を売却し、母と姉を故郷に残し慚愧の思いで中津藩を後にし大阪に出てきたのは、「門閥制度は親の敵で御坐る」と記して旧制度にたぎる怒りを抑え切れなかったからである。福澤は自分の過去を朝鮮人留学生の中に見出し、少なくとも自分を頼ってくる朝鮮人には救いの手を差し伸べることが自分の責だと感じたようになった。政権獲得に参加しなかった者は政権に入る資格なしとして幕臣福澤は明治維新を傍観者としてやり過ごした。しかし、みずからの思想の実現の場をどこかに求めていた。その場を福澤は朝鮮に求め、朝鮮の開化派もまた福澤に支援を求めたのである。

実際、往時の朝鮮の内実は、近代化とはおよそ無縁のものであったらしい。この時代、4度にわたり朝鮮旅行を敢行したイザベラ・バードは、その著『朝鮮紀行—英国婦人の見た李朝末期』（時岡敬子訳、講談社学術文庫）の中で次のように述べている。

「朝鮮国内は全土が官僚主義に色濃く染まっている。官僚主義の悪弊がおびただしくはびこっているばかりでなく、政府の機構全

体が悪習そのもの、底もなければ<sup>みぎわ</sup>汀もない腐敗の海、略奪の機関で、あるゆる勤勉の芽という芽をつぶしてしまう。職位や賞罰は商品同様に売買され、政府が急速に衰退しても、披支配層を食いものにする権利だけは存続するのである」

もう少し述べてみよう。朝鮮の高級官僚は<sup>やんぱん</sup>両班といわれ、科挙というきわめつきの難関である国家試験に合格した一握りの秀才たちであった。彼らが絶対的専制君主を文官として取り巻き、国王の意思を支え彼らの合議によって国家統治がなされた。道の長官に始まり、府、郡、県の長にいたるすべてにおいて中央から派遣された官僚が支配者となり、彼らが統治の任に当たった。そうすることによって地方に根を張る権力集団の発生を厳しく抑圧したのである。多数の武人が多様な地方権力を形成し、各地方に割拠した江戸時代日本の幕藩体制とは対照的な中央・地方関係であった。

あらゆる「権力資源」が中央官僚によって独占された政治体制である。この体制が李朝500年余を通じて厳格に守られてきたのであれば、王朝体制はいかにも堅固なものだと思われるだろうが、内実はその逆である。中央集権が極度に追求されたために、多様な利益集団や社会集団の形成が阻まれ、唯一残された集団凝集原理である血族に社会が分化していた。

朝鮮は父子関係を軸に血縁を縦に継承して

いく原理において一段と強い社会であった。血族と門閥こそが支配層兩班の基本的単位であり、血族を横断的につなぐ社会原理は希薄であった。国王を取り巻く中央官僚が社会の頂点に位置し、いくつもの有力な血族集団が頂点を目指して競い合い、その競合の過程で生じた血族間の抗争はまことに凄まじく、李朝史は血族抗争史として描くことさえ不可能ではない。

しかし、李朝末期の朝鮮においても現状を否定的に捉え、朝鮮の近代化を図らねば、帝国主義のこの時代にあっては自国の生存は危ういと考えた、開化派と称された一群の官僚がいたことも事実である。彼らが近代化のモデルとしたものが、すなわち明治維新であった。福澤が希望を託したのがこの開化派であった。開化派の指導者が金玉均であり、福澤が熱く支援したのが金であった。

金玉均の正伝が、林毅陸編『金玉均傳』（龍溪書舎）である。以下の記述はこれによるところが多い。金玉均は明治15年（1882）に訪日、3月6日に東京入り、同日に三田の慶應義塾内にあった福澤邸に到着した。金玉均は訪日の五ヶ月間、福澤の別邸に寄宿し、ここを拠点にして日本の実情の観察に余念がなかった。福澤の紹介により、井上馨、渋澤栄一、後藤象二郎、大隈重信、伊藤博文などに面会し、これら重鎮との議論を通じて金玉均の得た結論は次のようなものであった。

「日本の朝鮮に対する根本概念は開戦に非

ず、侵略に非ず、征韓に非ず、唯だ提携し、協力し、以て支那の圧抑を排斥するに在るを洞察し、又日本国民の親愛なる、信誼を尊重し、正義を好愛し、其の国家と国民は朝鮮の現状打開を援護する唯一の友邦」である。金玉均は「之を同志に計り、之を国王に奏言し、之を以て故国の改造に尽すべきことを固く信じて、一応帰国の上再遊すべく、同年七月初旬飄然帰国を先生（福澤：著者注）に告げ、横浜より神戸に航し、神戸より朝鮮行をすべく下関に至れり」

帰国のための乗船を待つ金玉均は、下関において壬午事変の報に接して驚愕する。壬午事変とは、政権から遠ざけられていた大院君が、権力を握っていた閔氏一族を、清国軍の支援を受けて放逐した明治15年（1882）の事変であった。元来が攘夷思想の大院君のクーデターであり、排外主義運動の色濃く、日本の公使館は焼き討ちに遭った。花房義質公使は漢城（ソウル）を逃れ、仁川を経て小舟で洋上を漂っていたところを英艦に救われて長崎に到着した。公使館が焼かれ公使が暴力的に追放されるというこの事件に日本政府は反発し、臨戦態勢をもって仁川に迫ったものの、仁川にはすでに清国北洋艦隊が姿を現しており、日本軍にはなす術がなかった。袁世凱率いる清軍は日本軍の機先を制して大院君を拉致し馬山に連れ出し、天津に拘送していた。清国軍の横暴は金玉均の怒りに火をつけた。

乱徒暴民の行動を謝し国交親善を期し、朴

泳孝を代表とする修信大使使節団が訪日した。金玉均もこれに同行した。朴泳孝は金の盟友である。明治15年（1882）10月のことであつた。金玉均はこの再度の訪日時にも、福澤諭吉によるさまざまな形での指導と支援の下で行動した。福澤は金玉均等に国権の伸張の必要性を熱意を込めて説き、実際、この頃から数を増した朝鮮留学生の大半を陸軍戸山学校に在学させ、軍隊教練に就かせた。福澤は『時事新報』明治15年（1882）9月8日の社説においてこういう。

「今朝朝鮮国をして我国と方向を一にし共に日新の文明に進ましめんとするには、大に全国の人心を一變するの法に由らざるべからず。即ち文明の新事物を輸入せしむることは是なり。海港修築す可し、灯台建設す可し、電信線を通じ、郵便法を設け、鉄道を敷き、汽船を運転し、新學術の学校を興し、新聞紙を發行する等、一々枚挙す可からず」

福澤が金玉均に繰り返して説いたのはこのことにちがいない。この時期、上述したように清国軍による大院君の拉致があり、これを喜んだのが清国に「事大」する閔氏一族であり、この一族の権勢により開化派の影響力が翳り、福澤も焦燥を感じていたのであろう。福澤は『時事新報』明治15年（1882）12月7～12日付の社説「東洋の攻略果して如何せん」で次のようにいう。

「我東洋の攻略は支那人の為に害しられたりと云はざるを得ず。然ば則ち之に処するの

法如何して可ならん。吾輩の所見に於ては唯二つ法あるのみ。即ち退て守て我旧物を全うする歟、進で取て素志を達する歟。今日の進退速に爰に決心すること最も緊要なりと信ず」

「退て守て我旧物を全うする歟、進で取て素志を達する歟」といって福澤は開化派の決起を促したのである。帰国した金玉均はクーデター計画を練る。明治18年（1885）12月4日、郵政局開局を祝する宴が同局で開かれ、これに集まる守旧派の政府要人を殺害し、直後に開化派官僚による新政府を樹立しようというクーデターが甲申事変であつた。米公使、英領事、清国領事、島村書記官、外務協弁などの外国人に加えて、開化派官僚としては金玉均、朴泳孝、徐光範など、事大党官僚としては閔泳翊、李祖淵、韓圭稷などが集つた。開化派は、日本兵、日本人壯士と一緒に守旧派六大官僚をその場で殺害。クーデターはひとまずの成功をみた。

新政府は、翌12月5日の未明、国王の裁可を経て樹立された。開化派官僚が内閣の中樞を占めたのはいうまでもない。同日、朝8時、開化派は各国領事の参内を得て新政府樹立の旨を伝達した。新政令は15項目にわたる。最初の3つは次の通りであつた。

1つは、清国に拉致されている大院君をほどなく帰国させるべしと主張して開化派が清国から自立した存在であることを証し、2つは、清国への朝貢を廃して清韓宗属関係を廃

棄し、3つは、門地門閥制度の旧弊を廃止して近代的人材登用の制度を実現することであった。ちなみに第3項目は「門閥を廃止し、人民平等の権を制定し、才を以て官を選び、官を以て人用ゆることなきこと」であり、表現にまで福澤の強い意思が反映されている。

甲申事変は朝鮮近代化のラストチャンスであった。しかし事態は開化派にとって困難をきわめた。袁世凱率いる大量の清軍によって開化派は蹴散らされ、金玉均は残った朴泳孝等とともに仁川港に停泊中の郵船会社汽船「千歳丸」に逃れた。

千歳丸は明治17年（1884）12月11日に仁川を出港、13日に長崎に入港。金玉均、朴泳孝は12月末に上京してまずは福澤邸を訪れてここに落ち着いた。落魄の身と変わり果てて福澤邸に現れた金玉均と朴泳孝に福澤は「よく生きていた」といい、二人は涙して福澤を仰ぎみるのみであったという。

その後、朝鮮政府は外務協弁メレンドルフを日本に派して金玉均の引き渡し交渉に臨ませたが奏功せず、以降、金玉均は朝鮮が送った刺客により上海で殺害されるまでの10年余を日本で過ごした。

金玉均が上海で暗殺されたのは明治27年（1894）年3月28日であった。金玉均は東京にあって清国公使李経方としばしば面会していた。李経方は李鴻章の養嗣子であり、彼は李鴻章の意を金玉均に伝えて次のような趣旨を語ったらしい。近年ロシアの東方攻略が急

速に活発化しており、これに抗するには日清連携が不可避である。そのために清国政府は対日政策を変更し、今後は親日政策に転じる可能性が高い。開化派の決起はいまだというのである。

金玉均は、これが「毘」だと直感した。しかし、万が一でもいい、開化派再興の可能性が開かれるのであれば、それに賭けて上海に赴こうと決意した。金玉均は箱根塔の沢の温泉で休養中の福澤を訪ねてその決意を伝え、福澤は翻意を促したが、金の覚悟は固かった。

金玉均は明治27年（1894）3月25日、夜10時、長崎港から「西京丸」に乗船。27日午後5時、上海の日本郵船埠頭に接岸、上陸して日本ホテル東和洋行に入った。翌28日午後3時30分頃、朝鮮から送られた刺客洪鍾宇が拳銃三弾を発して金玉均の頭を打ち抜いた。日本の租界地での事件であり、租界地の警察長、日本総領事代理立ち会いの下で検死。遺体は「西京丸」で日本に連れ帰ることになり棧橋に遺体が運ばれたものの、李鴻章により入船を阻まれ、彼の指示により遺体は軍艦「威靖号」に乗せられて朝鮮に運ばれた。

遺体は「凌遲の刑」に処された。棺より取り出した遺体を地上に伏せて首を挽き切り、右手は手首、左手は中腕のところで切断し、両足を切り落とし、胴は三カ所を深く割いた。切り取られた各部位は木や竹に結びつけ、朝鮮の五道の各所の路傍に立てられ、鳥や犬の食うがままに晒された。金玉均の実父金炳台

---

は囚われて獄舎に監禁10年、明治27年（1894）に金玉均の遺体が到着すると同時に銃殺刑に処せられた。母と妹は甲申事変の直後に毒をあおって自裁。弟は金玉均が在日中に捕らわれて獄死した。

金暗殺の第一報が入った直後の明治27年（1894）3月30日付の『時事新報』の社説「金玉均氏」には「韓客金玉均氏は清国上海客舎に於て同伴したる洪鍾宇の為に殺害せられたる由、既に其筋にも電報ありしと云へば定めて疑ひなき事実なる可し。曩あしたに氏が一朝計

敗れて其の本国を脱せし以來、憂うき年月を異邦に閱けみして流寓漂泊十年余、未だ身の安処を得ずして却かえつて刺客の毒手に斃たおれたりとは人生の惨事、実に気の毒の至りに堪たえず」と書いた。金玉均暗殺の報を伝えられた福澤は激しい怒りに満たされた。

かくして福澤の朝鮮に対する「恋」は、甲申事変のクーデター失敗によって醒め、金玉均暗殺によって失意と絶望に転じたのであった。